

# UP SUMMIT XC2

オールラウンドグライダーとして高い人気を誇ったサミットXCがサミットXC2として生まれ変わった。同時にサミットXC2は、新生UPのファーストグライダーでもある。新デザイナーのフランタは、サミットXC2を通じてUPにどんな新しい風を吹き込んだのか？

## 翼面積の小型化でマーケットの戦闘力をUP

チーフデザイナーにフランテイセック・パウロウセック(愛称:フランタ)を迎え

た新生UPの第一弾サミットXC2がついにベールを脱いだ。2001年に登場して以来、サミットシリーズはオールラウンドマシンとして高い人気を誇ってきた。2008年

に登場したサミットXCはトランゴ3をベースに開発され、不動のポジションを築き上げた。そして3年の歳月を経て生まれ変わったサミットXC2は、どんなグライダーに仕上がっているのだろうか？

うか？

注目のインプレッションに入る前に、触れておかなければならないことがある。一般的にチーフデザイナーが変わった場合、その後のメーカーの動き方には2つの方向性が考えられる。ひとつは長年培ってきたメーカーイメージを大切にしながら、キープコンセプトで新しいデザインを注入するケース。もうひとつはメーカーが新しいコンセプトを積極的に取り入れ、チーフデザイナーが自由にデザインするケースだ。UPは今回、積極的に変化する方向を選択したようだ。

その顕著な例がサイジングだ。従来のUPグライダーのサイズは、他メーカーのモデルと比較して15〜18%増しの翼面積を持っていた。それが良くも悪くもUPグライダーの特徴でもあったのだが、今回のサミットXC2からサイズごとの翼面積が小さくなり、体重レンジもわずかに変更されている。この変更によってマーケットの中でも競争力を向上できるとUP自身も公言している。

ピコ(LTF1)、アセント2(LTF1-1)、カンテガXC(LTF1.2)、サミットXC2(LTF/EN・C)トランゴXC(LTF・D)、エッジXR(オープンクラス)と続く現行ラインナップも、モデルチェンジごとに同様のコンセプトが注ぎ込まれ、新しいUPが徐々に完成されていくのだから。

## トランゴXC譲りのシャープでスマートなルックス

ともあれ、第一弾のサミットXC2を持ってエリアに出てみよう。今回は投影翼面積20・8mだった(サミットXC2では23・2m)のSMサイズを、飛



とストール特性の向上を目的にデザインされたもの。これがサミットXC2にも受け継がれシャープなルックスを演出している。

LTF/ENの認証はいずれもCクラス。認証試験の結果を項目ごとに細かく見てみると、「70〜75%の非対称コラップ」と「アクセル使用時の70〜75%の非対称コラップ」の2項目が飛行重量上限/下限の両方でCスコアになっている(Mサイズでは「アクセル使用時の70〜75%の非対称コラップ」のみ)。それ以外の一般的な特性はすべてAスコア、マナーバー関連の項目でBスコアが付いている。

## 軽快なハンドリングに驚き!

試乗日は8月上旬の朝霧高原。連日不安定な気象条件が続いていたが、多分に漏れずこの日も不安定な一日になった。まず練習場でグランドハンドリング。ライズアップはスコアが示すとおり、基本通りに綺麗に広げればスムーズかつイージーで特別なテクニックは必要ない。

グランドハンドリングで大まかな特性を理解したところで、テイクオフに移動する。移動する間に湧きだした雲で日射が遮られ、雲量が増えていく。ブローのタイミングに合わせてライズアップして助走を始めれば、スムーズで自然な加速でテイクオフ完了。ブレイクコードはやや長めにセッティングされているので、手に巻くなどの対応をグランドハンドリングで確認しておくの良いだろう。決して自分の判断で締め

てはならない。ブレイクコードを引き込めば、まずハンドリングの楽しさに驚かされる。しつかりした重さを感じながらも、引

けば引いただけ曲がってくれる。

非常にシャープな印象で、重いだけでなかなか曲がらないということはない。かといってそれが過剰なわけではなく、絶妙なバランスで、体重移動の必要もない。この感覚が気に入れば、サミットXC2はパイロットに悦楽のフライトを提供してくれるだろう。

たとえて言うならば、トルク感がある小さめのステアリングで峠を走っているようなご機嫌なフィーリング。乗り込んだ分だけ好きになるに違いない。

また、ここが新しいUPを顕著に示しているポイントで、翼面積が小さくなったことによる大きな変化のひとつだ。既存のUPユーザー以外の新しい層に強烈にアピールできるセルスポイントが明確化された。

アクセルの使用感は、1段階目から加減を十分に感じられ、2段階目もスムーズ。安定した大気の中ならばフルロックでも高い安定感が感じられた。沈下

## お薦めのパイロット像

サミットXC2をひとこと

で表現するならば、「高次元でバランスの取れたオールラウンドグライダー」だと言え

率の不快な増加もなく、時間を掛けて丁寧に仕上げられたセッティングに誰もが感銘を受けるだろう。なお、重量上限より余裕をもって乗る方が、本来持つ乗り味を楽しめる。

今あなたが安全に長く付き合えるオールラウンドグライダーを探しているならば、絶対お薦めの一機だ。



トランゴXCから受け継いだシャープなウイングチップが特徴的。



ラウンド型のインテークとリブに沿ってナイロンロッドを縫い込んだマイラーレス構造を組み合わせている。



ラインごとにテープで色分けされたライザーは2A+1A/4B/3Cの3本ライザーを採用。

行重量72〜94kgのほぼ中央に相当する82kgで試乗する。上面にスカイテックス44g/m<sup>2</sup>、下面にスカイテックス40g/m<sup>2</sup>を使用し、ラインはEdelridのTechnoraラインを個別別で使用。ライザーは基本3本(2A+1A/4B/3C)で、Aライザーが分岐しているのが翼端折りの時に便利だ。これにより機体重量はSMサイズで6・1kgとなり、前モデルのトランゴXCと比べて200gの軽量化となっている。

トランゴXCから採用されているV字のウイングチップは、ハンドリング

とストール特性の向上を目的にデザインされたもの。これがサミットXC2にも受け継がれシャープなルックスを演出している。

非常にシャープな印象で、重いだけでなかなか曲がらないということはない。かといってそれが過剰なわけではなく、絶妙なバランスで、体重移動の必要もない。この感覚が気に入れば、サミットXC2はパイロットに悦楽のフライトを提供してくれるだろう。

たとえて言うならば、トルク感がある小さめのステアリングで峠を走っているようなご機嫌なフィーリング。乗り込んだ分だけ好きになるに違いない。



3ライナーだが、CラインはDラインに分歧し2ヶ所で接続。トレーリングエッジにはハーフリップ構造を採用しエアフォイル安定させている。

SIZE	S	SM	M	L
翼面積(投影) m <sup>2</sup>	19.3	20.8	22.6	24.9
翼面積(実測) m <sup>2</sup>	22.5	24.3	26.4	29.1
翼幅(投影) m	9.3	9.7	10.1	10.6
翼幅(実測) m	11.6	12.0	12.5	13.2
アスペクト比(投影)	4.5			
アスペクト比(実測)	6.0			
飛行総重量 kg	60-80	72-94	85-110	100-130
速度 km/h(trim/max)	38-55			
安全規格(LTF/EN)	C			
価格(税込)	¥368,600			

※製品仕様は予告無しに変更になる場合があります。  
 製造元: UP インターショナル/ドイツ  
 輸入・販売元: (株)さんじゅう  
 〒321-0341 栃木県宇都宮市古賀志町1769-1  
 [TEL] 028-652-5531 [FAX] 028-652-5532  
 [E-mail] info@sanjuu.com  
 [URL] http://www.sanjuu.com